

カリスマ的指導者の時代は去ったか

マックス・ウェーバーの歴史哲学を想う

三 浦 信 行

(政治学博士)

一九七六年は世界的に総選挙の年であつて、スウェーデン、西ドイツ、イタリア、アメリカ、日本の五カ国では支配者の更迭が行われた。スウェーデンでは三〇年間支配の社会党が後退、西ドイツでは現状維持、イタリアでは共産党の進出、日本では三〇年間支配の保守党が後退、アメリカでは無名に近い新人が大統領に当選して、アメリカ人自身その正体の把握に苦んでいる。

だがアメリカではジェームス・ブライスによると「偉大な人物が大統領に選ばれることは稀だ」とあつて、「理由の一は偉大な人物は政治に入ることが稀であること、その二は『選挙の方法』が偉大な人物を選ぶようになっていないこと、その三は平時には偉大な人物を絶対に必要としない」とある。事実、今回カーター当選の過程を顧みると、かれが選挙のため、一年有余の極めて綿密な長期間にわたり、広大なアメリカ全土の津々浦々を、夫妻相携えて行脚し、文字通り、草の根を分けての大衆との接触を行つての選挙運動であつた。これでは偉大な人物はおろか、常人でも真似のできない、涙ぐましい努力の結晶であつた。ブライスという偉大な人物のなしえない「選挙の方法」によつたものである。

しかし「カリスマ」なる言葉が今日一般に使用されるように「一般大衆の支持、支援をうる非凡な精神力」との意味であれば、カーターはそれに該当する人物といわざるをえない。だが、地球上において軍事的にも経済的にも最強力なアメリカでのマスコミが、カリスマ的指導者、すなわち「非凡な能力」の指導者として、カーターを迎えているか否かは現在までのところ明らかでない。アメリカはそんな指導者を必要としない国柄たることを誇っているからでもある。共産圏では、中国が革命の始祖たち三人を一時に失い、真にカリスマ的指導者の出現を待つこと、大旱に雲霓を望むの有様である。中国の政治では軍の向背が決定的だが、軍人が表面に立つことは、党を中心として運営される共産主義国では許されない。カリスマ的指導者としての毛沢東の「名」は担ぐが、毛沢東の「政策」からは遠のくことが、中国の進歩と繁栄のため、とらざるをえない方向でなければならない。そこで思い出されるのが、マックス・ウェーバーのカリスマ的指導者理論である。

マックス・ウェーバーの「歴史哲学」における最も一般的な要素は、純理論的説明の原則、または合理主義の原則 (principle of rationalization) である。その理由とするところは、すべての制度的構造の盛衰も、階級や政党や支配者の浮沈も、合理主義の一般的な傾向が、必要な手段を与えるからだである。かかる過程によって人間の態度や心的状態に変化が引起されるので、ウェーバーは、好んでシルレルがいった「世界の幻想からの覚醒」(disenchantment of the world) なる文句を引用している。ウェーバーによると合理主義の範囲と方向には限界があつて、それは消極的には思想という不思議な力をもつ要素を、どこまで排除しうるかの程度か、積極的にはどこまで思想の組織的一貫性と論理的の一致をかちとりうるか、の程度によって測定されるとある。

宇宙をかくのごとく包括的かつ深長な意味に解釈せんとする衝動は、知識人のグループ、宗教上の予言者と教師、

賢人と哲学者、法学者と経験ある芸術家、経験を重んずる科学者に帰すべきだ、とウエーバーは説明すると同時に、合理主義はこれを社会的および歴史的に仕分けすると、種々の意味をもつことになる。ウエーバー自身は「知識の社会学」なるものの成立に大きな貢献をしている。

シルレルのいう「世界の幻想からの覚醒」なる命題に関するウエーバーの見解は、自由主義の要素と啓蒙哲学の要素とを包含している。ここにいう啓蒙哲学とは、人間の歴史を道徳的完全性（莊嚴性）を指向するか、または漸増的な技術的合理性を指向して、直線的な「進歩」を遂げるものと解釈するのである。しかし実験を重んずる科学に、哲学的要素を加えることを懐疑的に嫌うウエーバーは、歴史の時代を循環的または一直線的進化と、明白に解釈することを排除している。これまでのところ、ヨーロッパにおける文化発達の連続体は、循環的運動の完成されたものでもなければ、明白に一直線的発展の方向をとったものでもない。

しかしこの合理主義の過程は、「歴史の不連続性」(discontinuity of history) によって穴をあけられている。それがため硬化された制度的構造は崩壊し、日常生活の形態は、増大する緊張と圧迫と苦痛との状態を乗切りえなくなってしまうのである。ウエーバーがカリスマなる思想を導入したのは、かかる「危機」であって、それは官僚主義との均衡をとるための理念であった。ウエーバーはこの思想をストラスブルグ出身の教会史の権威で法律家たるルードルフ・ゾーム (Rudolf Sohm) から借用したものである。ゾームは初期キリスト教会がもった権威の歴史的発達を研究し、キリスト教会の「支配構造」を歴史的に重要な特例として、その社会学的特殊性を明かにした功労者である。

カリスマ (charisma) の語源はギリシヤ語の (kharisma) であって、元来は天賦の才能を意味するにすぎないが、ウエーバーはこれを定義して「自分免許」の指導者であって、苦難な状態にある人たちに服従されるか、またはその

人を異常な資質をもつ指導者と信ずるがため、服従される人だとある。世界的宗教の始祖、予言者、軍事的または政治的英雄たちが、カリスマ的指導者の原型である。奇跡、啓示、勇気を示す英雄的な手柄、測り難い成功などが、これらの能力の特徴的なマークであって、「失敗すれば身の破滅になる」ことがかれらの運命である。

ウエーバーは社会的力学が多くの社会的勢力の結果たる事実を知悉するにかかわらず、カリスマ的指導者の出現に多大の重要性をおいている。かかる指導者の運動には熱意がこもっていて、その異常な熱意のうちに、「階級」とか「身分」などの障壁が、時として、友愛的な親和とか、あふれるばかりな共同体的感情に、席を譲るのである。だからカリスマ的英雄とか、予言者たちは歴史上真の革命的勢力とみなされるのである。

官僚その他の制度、特に家庭制度などは、日常生活のきまりきったものとみなされ、カリスマはこれらすべての制度的な日常化、伝統上の日常化、合理的管理に服する日常化に反対である。これは「経済的秩序」にも適用されるのであって、ウエーバーは一六世紀にメキシコやペルーを征服した、スペイン人たちや、略奪的大実業家をカリスマ的人物だと描写している。

ウエーバーによるとカリスマなる理念を厳格な専門的意味に使用すれば、一切の「価値判断」から解放されねばならないとある。故にジエレミア（旧約聖書最大の予言者の一人）も、ステファン・ジョージも、キリストもナポレオンもモルモン宗の開祖も、アラビアの狂暴的な斗士も、すべてカリスマ的指導者と例示されうるわけは、かれらが個人的に異常な資質をもつと信じられているため、人民がかれらに服従する事実を共通にもっているからである。

カリスマ的指導者に関するウエーバーの思想は、かれの歴史哲学の「継続」であって、カーライルの「英雄崇拜論」に次いで一九世紀の歴史家たちの多くに影響を与えている。かかる思想を強調することによって、不朽化された個人

が「歴史の主権者」になっている。

しかしウエーバーが「カリスマ的人物の主権」を強調することは、制度上の機構を過小評価することを意味しない。反対にそれはカリスマの日常化 (routinization) を追跡することによって、因果関係的な重要性を制度的な日常化に与えるのである。かくしてウエーバーはカリスマの日常化を強調することによって、社会的「決定論」(人間の意志や行為は、なんらかの原因によって、決定されるとの哲学上の用語) を保持している。ウエーバーのこの問題の取扱方は、因果関係上の「多元論」を維持し、経済的秩序を導入して、バランスをとることに、絶えず努力することを立証している。

カリスマ的運動は、伝統主義化または官僚主義化に日常化されうる。両者のいずれのコースをとるかは、主として指導者たちか、服従者たちの主観的意図に依存しない。それはその運動の制度的骨組、特に経済的秩序に依存する。カリスマの日常化は経済条件による。この点において経済が支配するので、経済が他から支配されるのではない。

ウエーバーの歴史解釈における哲学的要素は、合理的な日常課程化(永続的制度と物質的利益)と、カリスマ的運動(指導者と思想)との二律背反的なバランスにある。人間の自発性と自由とは英雄的な熱意を生み、かくしてそこにはエリート(巨匠、大家)に対する貴族的な強調が行われる。この強調は近代民主主義に対するウエーバーの態度と密接に連携している。ウエーバーはカリスマを強調するにかかわらず、歴史上の偉大な人物に焦点をおいているらしくない。ナポレオン、カルビン、クロンウエル、ワシントン、リンカーンの名は、かれの著書に現われているが、それはついに加えたもので、ウエーバーとしてはこれらの偉人たちが、制度上の秩序と歴史の継統とにおいて、これらのやった仕事のうちで、なにが残っているかを把握せんと試みている。ジュリアス・シーザーではなく、シー

ザー主義、カルビンではなく、カルビン主義がウエーバーの関心事であった。

カリスマ的權威の存在はその性格そのものによって、特に「不安定」なものである。カリスマの所有者がカリスマに先行するかも知れない。十字架のキリストのごとく、かれの神に見捨てられたと感ずるかも知れない。かれの美德がかれから去ったと黨員に立証するかも知れない。その時はかれの使命は消滅したのであって、新しいカリスマ所有者を探索するか、待望するかである。しかしカリスマ所有者がかれの黨員から見捨てられるのは、純粹なカリスマは個人的な力から来る以外の正統性を知らない場合のみである。その個人的な力は絶えず立証されている。カリスマ的英雄は官庁の管轄権のごとく、かれの權威を、法典や規則からえたものではない。かれはまたかれの權威を、伝統的な慣習や、父権のごとく封建時代の信条からえたものでもない。カリスマ的指導者は、専ら生活におけるかれの力を立証することによってのみ、その權威を獲得し維持するのである。もしかれが予言者たらんとすれば、かれは奇跡を行わねばならない。もしまたかれが將軍たらんとするならば、英雄的行為を行わねばならない。

ヒトラーの「マイン・キャンプ」によると、指導者は学者でもなければ、理論家でもなく、実地を踏んだ心理学者で、かつ組織者でなければならぬ。なぜ心理学者かといえば最多数の受動的な支持者を獲得する方法に熟達しなければならぬからであり、またその上になぜ組織者でならねばならないわけは、かれが獲得した支持者を結合させ、これを緊密な団体に作り上げねばならないからである。組織的だとはばれうる書籍は、「宣伝」を取扱ったもので、しかも著者自身いかにして宣伝に熟達したかの段階を描いた部分のみである。いかなるゴマカシも見落さない。紙に書いた議論よりも雄弁によることが有利である。照明、雰囲気、シンボル、群集の効果、集会は夜間に開くことが有益であるわけは、抵抗的気分の力が弱いからである。指導者としての手腕は暗示、集团的催眠術、あらゆる種類の潜

在意識的誘導を、巧妙に利用する。それが成功する鍵は、心理学であり、応況な人民大衆の思考的過程を理解する能力である。指導者は芸術家が粘土をこねるごとく、人民を巧みに操縦するとある。ウエーバーのカリスマ的指導者に関する定義によると、「価値判断」とは無関係とある。ウエーバーの死後一〇年にして、かれの祖国を救わんとして出現したヒットラーは、カリスマ的指導者といって差支えない。

ドゴールの「希望の回想」(朝日新聞外報部翻訳)によると、「私が最高権力をもったのは、フランスが悲惨のドン底に陥った時であった。この最高権力によって私はわが国を救済に導きえたのである」とのべ、「私がフランスの国防と統一と運命とを引受けたのは、世襲的権利によったものでも、人民投票によったものでも、国会の議決によったものでもない。フランス自身の命令にも均しい呼び声によったもので、私が至高の職務にあるのは、私がフランスの救い主と認められたからに外ならない。憲法上の規定の枠を越えてフランス国民と私とのしかかった事実のためである」と説明している。カリスマ的指導者の出現が要求される時機は、正にドゴールがフランスの政權を掌握した当時のことではなければならない。ドゴールは第二次世界大戦当時、亡命中、北アフリカの一地においてルーズベルト大統領と会談した際、「私はジャン・ダークの生れ替りで、フランスを救済する使命を授けている」とのべ、大統領のご気嫌を損じたという話が当時流布されたが、この話がドゴールの信条であったことは前述のかれの著書からも窺われる。

ドイツ民族が生んだ唯一人ともいわれる偉大なカリスマ的指導者ビスマルクが、それまで地理的名称にすぎなかったドイツを、「鉄血政策」(現下の問題は国会の議論や決議では解決できない。鉄と血を要求する、とのかれの演説による)に基く計画的な三回の戦争を矢継ぎ早に行つて、これを統一して「大ドイツ帝国」を建設した当時のマックス・

ウエーバーは六歳の小児にすぎなかった。しかしかれの父はベルリン市会議員、プロシヤ国会議員、新ドイツ帝国議会の議員として、政界に活躍中であつたため、小ウエーバーの人生と思想は、長ずるにしたがつて、ドイツに生起する政治上の出来事とその関心とから離れることはできなかった。新ドイツ帝国の大宰相としてのビスマルクの治政は、小ウエーバーが二六歳に達するまでなお二〇年間継続した。ウエーバーのビスマルク評価は終始変化なくビスマルクが、ドイツ統一の政策を仮借なく追求し、新帝国のため大国の地位を達成せんとする、政治的天才を承認するのみならず、これを賞賛したものであるが、ウエーバーは無批判的にビスマルクに降伏してはいない。ウエーバーはビスマルクを英雄化しなかつた。否、かれはドイツの中産階級間に広く流布されていたビスマルクを英雄として崇拜することを軽蔑していた。ウエーバーのビスマルクに対する基本的批評は、ビスマルクが「独立的な精神」の政治的指導者たちには不寛容であつて、従順で、すなおな官僚に取巻かれていたことであつた。ウエーバーが、最高の意識的価値として、達成し保存せんとしたものは、知的自由であつた。ウエーバーは学者であつたが、かれは常に活動的な政治家の見地から筆をとっている。

古代ローマの共和制時代の末期は、カリスマの指導者たちによるローマの支配権をめぐる激しい血闘の権力斗争が展開され、長期にわたる内乱がつづいたが、ジュリアス・シーザーの出現によって將に統一されんとした瞬間、かれが暗殺(紀元前四四年三月一五日)されたので頓挫した。しかしかれの養継子オクタビアスによって暗殺者の一味(ブルータスとカシアス)はアクチウムの戦いで掃討されローマは平和を取戻し、オクタビアスはインペラトールの名稱とともに元老院からオーガスタスの尊号を贈られ、ローマは帝国に変貌した。史家はアクチウムの戦のあつた紀元前三一年をもってローマの共和制が終り帝国が始まったとす一派と、オクタビアスがインペラトールになつた紀

元前二七年をローマ帝国の始期とする一派とに分れている。

マックス・ウエーバーは青年時代にローマ史を研究し、シーザーの晩年ローマの執政官（コンサル）であつて全ローマ史上最大の雄弁家（三百年以前ギリシヤに現われたデモスセネスと対照）、否、雄弁家以上に哲学者でもあつた、シセロ（紀元前一〇六年一月三〇日生れ）に多大の興味を惹かれた。ビスマルクの「現実政治」（Realpolitik）の時代に、政治家を父にもつた青年ウエーバーは、シセロの演説集を耽読したが、結局、シセロに大失望し、年長のベルリン大学生たる従兄弟宛の書簡において、シセロの作品全部は「ばかばかしいデタラメだ」と簡単に片付け、殊にかれを肉体的にも葬らんとする大陰謀を企てた大敵キヤトリンに対する演説から見ると、「シセロは言葉使いの愛好家、拙劣な政治屋、無責任な弁士にすぎない。あんな長たらしい演説で、なにを達成せんとしていたのか。シセロはキヤトリンを殺害し、武力で脅威的な陰謀を押し潰すべきであつた。一言に要約すればシセロの演説は極めて弱くかつ無目的で、政策全体がその目的に照し、ぐらついている。シセロは適切な決意ももたなければ、手腕もなく、かつ時機を待つ能力もなかつた」と酷評している。

ウエーバーのこの書簡に対し、先輩たるかれの従兄弟は、青年ウエバーは、かれが読んだ多くの書籍を、わけもわからず、機械的に繰返すものだと回答したところ、ウエバーは憤然として「おそらくあらゆる事物は、間接的に書籍から生ずるものと私は認める。読者に不明な事物に関し、人間を啓蒙し教育する以外に、書籍はなんのために役立つのか。私が書籍と、その解説または評論と、その推論とに対し、非常に敏感なのかも知れない。しかし私がさきに述べた、シセロ評は、他の書籍からとつたものではない」と反駁した。

シセロはかれを不倶戴天の敵として、かれを殺害せんとした、カヤトリンに対し、前後四回にわたり、大演説を行

ってキヤトリンの陰謀をあげている。青年ウエバーが「無目的な贅言」だと罵倒したのは元老院におけるこれらの演説であった。しかしキヤトリンは、ローマの政府軍と斗って、紀元前六二年かれの部下とともに、捕えられ、死刑を宣告、執行された。執行官たるシセロは「かれらは生きてきた」と、かれの死を意味するローマ式の表現で発表した。

シーザー暗殺当時シセロはローマにはいなかった。オクタビアスはアントニーとともにシーザーの暗殺者たちを倒して、ローマに帰えると、両人は最高の権力をめぐって争いをはじめた。ローマに帰ったシセロには、元老院でアントニーを排斥する最初の演説を行い、次いで元老院においてアントニーに対する戦を力説した。しかるにオクタビアスがアントニーと和解したことが、シセロにとって致命的で、かれの氏名をかれらの敵者名簿に加えしめた。海上から亡命の機会があつたにかかわらず、躊躇しているうちに、追手に捕えられ、紀元前四三年二月七日処刑された。享年六三才であった。若いウエバーの趣向には合致しなかつたようだが、シセロはローマ史のみでなく、人類の歴史を通じ、輝かしい光を放つ偉大な人物たることに大多数の歴史家は異存ない。

〔参考文献〕

1. Gersch and Mills, 'From Max Weber', London, 1948
2. Bendix, 'Max Weber, an intellectual portrait, New York, 1960
3. James Bryce, American Commonwealth, Vol. I, New York, 1914
4. Select Orations of Marcus Tullius Cicero, translated by C. D. Yonge, New York
5. Putarch, translated by John Dryden and revised by Arthur Hugh Clough